九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

北村透谷と中国の古典詩人 ： 「ゆきだふれ」と「ほたる」を中心に

楊, 穎
九州大学大学院比較社会文化学府 ： 博士後期課程

https://doi.org/10.15017/1462144

出版情報：中国文学論集. 42, pp.96-110, 2013-12-25. 九州大学中国文学会
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

中国文学論集　第四十二号

北村透谷と中国の古典詩人

――「ゆきだふれ」と「ほたる」を中心に――

楊　穎

はじめに

北村透谷の作品に関する受容について、今まで、西洋の思想・文学との関連はかなり解明されているが、和漢文学、特に漢文学との関連についてまだはっきりしてない点が多い。

透谷は明治十四年、家族とともに上京し、泰明小学校に転校した。明治十五年一月、泰明小学校を卒業し、岡千仞の綏猷堂に入った。[1] 神辺靖光の研究[2]によれば、明治初期の漢学塾においても、四書五経が漢学塾の必修科目であることは変わらなかった。「明治五年・開学願書」中に、教科書が記載されてある二十七塾には透谷が在学した岡千仞の綏猷堂も含まれている。その二十七塾について使用教科書を集計したものは次のとおりである。

この表は二十七塾の漢籍重視の度合いを表している。透谷はその後、山梨県南巨摩郡睦合村南部にあった近藤喜則経営の基督教主義を加味した英・漢・数の私塾蒙軒学社に入った。「当時生徒は三十五六人であつた。みな毎日のように唐詩と漢文を作らされた」[3]と、勝本清一郎は、当時、甲州の蒙軒学社で透谷と同窓だった

部門	書名	点数
経	左伝	一七
	孝経	一一
史	十八史略	一一
	国史略	一一
	漢語	一〇
	温故記	八
	明史	六
	律書	五

部門	書名	点数
子	小学	八
集	文章軌範	七
	唐宋八家文	五
類	蒙求	六
日本史	国史略	一一
	日本外史	一一
	皇朝史略	六

尾島牧師から聞いていた話である。十六～八歳ごろの透谷は唐詩を沢山作っていた。後年透谷の妻になった美那子の話はそれを裏付けている。[4] 現存する透谷の詩は十六歳の時にガラス写真の桐箱の蓋の表裏に一首ずつ書いた七言絶句と、「富士山遊びの記憶」の中の七絶一首、五言と七言とを交互に混えた長詩一篇と五七・七五体の短詩一首である。それらに対して、勝本は「当時の透谷はまだ日本語の詩を作り始める事には全然目覚めていなかったのであつて、そこに何年かの漢詩製作時代があつたわけであつた。また後年の日本語の詩や散文に於いても漢文風の漢字の當てかたは、死の年に至るまで透谷の作品の特色であつた。従つて、どこかで少年透谷が漢詩漢文をかなりやらされた所がなければならないのである」と述ている。

明治十六年九月、透谷は東京専門学校（早稲田大学の前身）の政治科に入り、「（和漢文学）の文章規範、八家文、史記」「（作文）の和漢作文」などを多少履修した（柳田泉の「透谷伝の一節」[5]）。この当時について透谷は「生は常に学問の仕方は自ら脩め自ら窮むる禅宗臭い説を持ち居けり、左れば、学校に在りても教科書をしらべんよりは数多の書史に渉獵するこそ面白しと、日々書籍室に入りて漸く鬱を慰め居けり」[6]と述べている。この時期の透谷の読書範囲は、それまでの「楠公三代記、漢楚軍談、三国志等」の英雄小説のレベルの枠を越え出て、伝習録、韓非子、荘子などの中国の思想家の本にまでも及んだ。

透谷がその著作の中で触れている中国人は思想家（韓非子、老子、荘子、孔子、孟軻、王陽明）、詩人（白楽天、陶淵明、高青邱、韓愈）、英雄（岳飛、張巡、項羽、漢王）の三つのタイプに分けられる。透谷死後、友人・平田禿木も透谷が高青邱を愛読していたことを伝え、高青邱の詩句（「青邱子歌」と「感舊酬宋軍咨見寄」）を借りて、透谷を偲んでいる。[7]

従来の先行研究では、透谷の思想と老荘思想及び王陽明の思想との関係を扱ったものが多い。[8] 本論文では、作品分析を中心とし、透谷の「ゆきだふれ」（『白表・女学雑誌』第三三二号、明治二十五年十一月十九日）と陶淵明の「乞食」との関連性を検討し、また、島崎藤村（詳細は後述）によって指摘されている「ほたる」（『三籟』第四号、明治二十六年六月三十日）と杜甫の「蛍火」とのかかわりについて検討したい。

一　透谷と陶淵明の「乞食」

明治二十五年十一月五日、透谷が東禅寺の近くに住んでいた頃に、按摩男から聞いたという「実聞」により、書かれた「鬼心非鬼心（実聞）」が『女学雑誌』に発表された。実直なかつぎ売りの八百屋を経営する夫婦は数年来の金融の逼迫により、不正の損失を蒙り、妻が気鬱に罹ったようである。ある日、妻の口から「もしこの小児なかりせば、日々に二銭を省くことを得べきに」という言葉が洩れた。結局、妻は息子を殺した後に、自分も狂ったという物語である。この物語を聞いてから、透谷は以下のように歎きに沈む。

昨夜は淵明が食を乞ふの詩を読みて、其清節の高きに服し、今夜は惨憺たる実聞をものして、思はず袖を湿らしけり。

半月後、透谷は同じ雑誌でものしりの「乞食」と「浮世人」との問答で構成されている「ゆきだふれ」（『白表・女学雑誌』第三三二号、明治二十五年十一月十九日）を発表した。この作品は「瘠せにやせ」「枯れにかれ」「何を病み」「なやみ」てか、「みにく」く「いたまし」く、どこの誰とも知らず、「親」や「子」、「妻」や「妹」があるのだろうかと疑われる「ゆきだふれ」の姿を描いている。その後の「客居偶録」にも『エマルソン』にも陶淵明の名前が繰り返し引用されている。さらに宮崎湖處子のワーズワースと陶淵明の比較論に刺激され、エマーソンと中国の詩人（陶淵明・王陽明・孟軻）の類似を指摘している。[9] ただし、当時病気に苦しめられていた透谷はそれらに関する比較については「之を後の学者に残し置くことゝせざるべからず」と言っている。

1　透谷と陶淵明（『文章規範』と友人・宮崎湖處子）

透谷の陶淵明への愛好はいつからなのか詳細は分からないが、遅くとも東京専門学校の政治科に入る頃からだろう。透谷が『文章規範』を履修したことが柳田泉の調査で明らかになっている。この書は、韓愈・柳宗元・欧陽脩・

蘇洵・蘇軾など、古文の大家の作品を集めたもので、例外として、諸葛亮（「前出師表」）・陶淵明（「帰去来辞」）という六朝以前の作家が取り上げられている。また、明治十八年の紀行文「富士山遊びの記憶」の中に漢詩が三首ある。最後の一首は、透谷が富士山の頂上についてから書いた漢詩である。「自驚天地大（自ら驚く　天地大なり）恍視山川一様清（恍として山川を視れば一様に清し）感情出憶外（感情　憶外に出る）悠然下瞰白雲行（悠然として下瞰す）[10]」という詩の中の「悠然」は陶淵明がよく使う言葉である。例えば、「飲酒」の「采菊東籬下　悠然見南山（菊を東籬の下に採り、悠然として南山を見る）」、「帰鳥」の「日夕氣清　悠然其懐（日夕気清し、悠然として其れ懐ふ）」及び「癸卯歳始春懐古田舎」の「是以植杖翁　悠然不復返（これを以て植杖の翁、悠然として復た返らず）」などである。

東京専門学校政治科に入学した翌年、つまり、「七月二十六日、宮崎湖處子、東京専門学校政治経済学科に入学、夏に透谷と相知る[11]」こととなる。少年時代から陶淵明を愛読していた宮崎湖處子は明治二十三年六月、『帰省』を刊行し、故郷を賛美した田園文学の嚆矢として好評を得た。『帰省』九章のほとんどの冒頭に陶淵明の詩が置かれている[12]。明治二十五年八月から『国民新聞』に連載された「帰去来」（八月二十四日～九月十八日）は再び東京から故郷までの紀行文である。題名は陶淵明の「帰去来辞」から借りたものである。湖處子が透谷と再会したのは恐らく「楚囚之詩」出版の直後であった[13]。その時期から透谷の自殺まで「暇ある毎に君を訪ふ」とある。二人が陶淵明についてもいろいろ語り合ったことは想像にし難しくない。陶淵明と透谷に関する先行研究は少ないが、佐藤善也の注釈による『北村透谷と徳富蘆花集』に、「蓬莱曲」序の「蓬莱山は古来端雲の靉靆くところ、楽仙の盤桓するところ」の「盤桓」は陶淵明の「帰去来辞」中の「撫孤松以盤桓」に見えるという指摘があり、「蓬莱曲」の発行所である養真堂の「養真」は陶淵明の「辛丑歳七月赴仮還江陵夜行塗口」中の語であるとの指摘がある[14]。

2　透谷の「ゆきだふれ」と陶淵明の「乞食」

「ゆきだふれ」は明治二十五年十一月十九日『白表・女学雑誌』第三三二号に発表され、ものしりの「乞食」と「浮世人」との問答で構成されている作品である。全体は五部に分かれ、「ゆきだふれ」が、世間の声に対して、み

な「家」を持ち、故郷を持つ世間人の次元の低さを笑う内心の言葉を語っている抒情詩である。一方、十四行からなる陶淵明の「乞食」は自分を乞食に喩えて、飢えに苦しめられ、さまよう姿を描いた詩である。

以下、両作品の類似点について検討したい。まず、「ゆきだふれ」の第一部と「乞食」を掲げる。

○瘠せにやせたるそのすがた、
　枯れにかれたるそのかたち、
　　何を病みてかさはかれし、
　　何をなやみて左はやせし。
○みにくさよ、あはれそのすがた、
　いたましや、あはれそのかたち、
　　いづくの誰れぞ何人ぞ。
　　里はいづくぞ、どのはてぞ。
○親はあらずや子もあらずや、
　妻もあらずや妹もあらずや、
　　あはれこの人もの言はず、
　　ものを言はぬは唖ならむ。
○唖にもあらぬ舌あらば、
　いかにたびゞとかたらずや。
　　いづくの里を迷ひ出て、
　　いづくの里に行くものぞ。

引用文の傍線部により、「里はいづくぞ、どのはてぞ」「いづくの里を迷ひ出て」「いづくの里に行くものぞ」のよ

うなどこへいくのか分からない「ゆきだふれ」が描写されている。

乞食　　食を乞う　　陶淵明

飢來驅我去　　飢来つて我を駆り去かしむ
不知竟何之　　知らず　竟に何くに之かん
行行至斯里　　行き行きて斯の里に至り
叩門拙言辭　　門を叩いて言辞拙し
主人解余意　　主人は余の意を解し
遺贈豈虛來　　遺贈あり　豈に虛に来らんや
談諧終日夕　　談諧して日夕を終え
觴至輒傾杯　　觴至れば輒ち杯を傾く
情欣新知歡　　情は欣ぶ　新知の歓
言詠遂賦詩　　言詠して遂に詩を賦す
感子漂母惠　　子が漂母の惠みに感じ
愧我非韓才　　我の韓才に非ざるを愧づ
銜戢知何謝　　銜戢　何もて謝するを知らんや
冥報以相貽　　冥報　以て相貽らん

「何之」、「行行」という言葉は主人公が飢えで食を乞おうと思うが、そんなおのれを恥じる矛盾した気持ちが表現されている。そしてとうとう何処と定めることなく、歩き歩いて遂に里に至る。透谷の「ゆきだふれ」の「里」、「いづく」「迷ひ出て」の言葉遣いはおそらく陶淵明の「乞食」に由来していよう。また、透谷の「ゆきだふれ」の第三部は以下のようである。

○こはめづらしきものごひよ、
　唖にはあらでものしりの、
　　乞食のすがたして來たりけり。
　　いな乞食の物知顔ぞあはれなる。
○誰れかれと言ひあはしつ、
　物をもたらし、つどひしに、
　　物は乞はずに立去れと、
　　言ふ顔にくしものしりこじき。
○里もなく家もなき身にありながら、
　里もあり家もある身をのゝしるは、
　　をこなる心のしれものぞ、
　　乞食のものしりあはれなり。
○世にも人にもすてられはてし、
　恥らふべき身を知るや知らずや、
　　浮世人とそしらるゝわれらは、
　　汝が友ならず、いざ行かなむ。

「唖にはあらで」、「物は乞はずに立去れと」、「言ふ顔にく」い姿が描写されている。それに対し、陶淵明の「乞食」も同じように、「門を叩いて言辞拙し」とある。この「言辞拙し」は透谷の「ゆきだふれ」と一致している。「ゆきだふれ」発表の一週間後、「餓」というエッセーが発表され、透谷は次のように述べている。

「餓」は実に大敵なり。別して精神的人物の大敵なり。多数の人、「餓」の為に其の気節を枉ぐ。彼は常に吾人

の周囲に毒箭を注射す。その箭一矢は一矢だけ吾人を吾人の正当の位地より傷くる事つねなり。
尋常以上の気骨あるものにあらざるよりは、「餓」の悪敵より射出す毒箭の害を被ることなき能はず。滔々たる天下、「餓」の奴隷たらざるもの幾個かある。(『平和』第八号、明治二十五年十一月二十六日)

ここでもまた透谷は餓えによる精神への侵害について述べている。また、半年後の「客居偶録」では、透谷が陶淵明の「乞食」の詩への感服の余韻がまだ続いていることを示唆している。

天の人に対する何ぞ厚薄あらん。富めるもの驕る可からず、貧しきもの何ぞ自ら愧づるを須ひん。額上の汗は天与の黄金、一粒の米は之れ一粒の玉、何ぞ金殿玉楼の人を羨まむ。唯だ憫れむべきは食を乞ふの人。天の彼を罰するか、彼の自ら罰するか、韓郎の古事、世に期し難く、靖節の幽意、人の悟ることなし。(『評論』第九号、明治二十六年七月二十九日)

夕食を済ませて戸外に出た透谷は五十ぐらいの老爺が木車を挽き、十歳ほどの子供が小鼓を打ちながら乗る姿を見て、「当年豪雄の戦士、官軍を悩まし。奥州の気運を支へたりし快男子、今は即ち落魄して主従唯だ二個、異境に彷徨して漁童の嘲罵に遭ふ。然も主は僕を捨てず、僕は主を離れず」と想像を膨らませた。透谷はこの風景に感動を覚え、この二人に食事を施す。

禪羽子悄然として立つこと少時、渠を招きて与に車を推し、之を小亭に引きて飯を命じ、鮮魚を宰して食はしめ、未だ言を交ゆる事多からず、その旧事を回想せしめん事を恐るればなり。われ先づ去る、去る時語なく、無限の情あり。

陶淵明の「乞食」の主人が自分の意を解し、飲食をさせてくれた「主人は余の意を解し、遺贈あり　豈に虚に来

らんや」というやりとりと同じように、透谷も老僕を店に引き入れ、飯を注文し、彼らにとって食べることが不可能だった鮮魚をたべさせる。ただし、食を終えた陶淵明と主人の「談諧して日夕を終え、觴至れば輒ち杯を傾く」、つまり、夕方まで談笑し、杯を出されると一気に飲み干すという愉快な雰囲気に対して、透谷の方は旧事を思い出させないようにと言葉もあまり交わさず、自分から先に去ったが、言葉なくとも無限の情があった。「乞食」の主人は快活な雰囲気で相手に恥ずかしさを感じさせないが、一方、透谷は無言で先に去ることで、別趣の思いやりが感じられる。

二　透谷と杜甫の「蛍火」

透谷は詩作上の絶筆となる「露のいのち」を描き出すまでの五ヶ月の間に、作品中に「ほたる」・「蝶」・「露」の三つのモチーフを用いている。透谷の残り少ない余命において、「ほたる」は作品の中心モチーフとして選ばれた。「ほたる」のモチーフに関する先行研究では、ほとんどが作品の解釈にとどまり、作品の受容についての指摘は無かった。

「ほたる」が発表された五十年後、つまり、一九三四年二月、プロレタリア詩雑誌の正系といえる位置を占める雑誌『詩精神』が創刊された。その創刊号の巻頭には透谷の遺稿「夢中の詩人」に続いて「藤村氏に透谷をきく」「透谷について」などの記事が並んでいる。「藤村氏に透谷をきく」には

北村氏は杜子美を読み、余程影響を受けたものと思はれる蛍の詩に「腐草を出でて」という句がありますね。あれなど杜子美そのまゝだつたと思ひます。

とある。これは、『詩精神』を創刊した新井徹が藤村にインタビューしたものからの引用である。後年の研究者である尾西康充も藤村のこの発言を引用しているが、この論文は『詩精神』を中心とし、特に、梅川文男ら若い詩人た

ちがどのように「高く翔った透谷の精神を嗣」ぎ、「政治的敗北を乗り越え」ようとしたのかを論じたもので、透谷の「ほたる」と杜甫の詩との関連については、関心を寄せていない。

1　透谷の「ほたる」と杜甫の「蛍火」

落日の光茫も収まったたそがれ時、ものみな静寂にひたる細川の水辺に姿をあらわした「ほたる」は、草陰に「わづかに影を点」して、月に照らされながら、たちまち空に消えていく。全詩は以下のようである。

ゆふべの暉をさまりて、
　まづ暮れかゝる草陰に、
わづかに影を點せども、
　なほ身を恥づるけしきあり。

羽虫を逐ふて細川の、
　淺瀬をはしる若鮎が、
靜まる頃やほたる火は、
　低く水邊をわたり行く。

腐草に生をうくる身の、
　かなしや月に照らされて、
もとの草にもかへらずに、
　たちまち空に消えにけり。

北村透谷と中国の古典詩人

一方、杜甫の「螢火」は寓意的な詠物詩である。宮中に蔓延していた悪い宦官たちの事を誹る為に螢を借りて作った詩である。

螢火　　杜甫

幸因腐草出　　幸に腐草に因りて出づ
敢近太陽飛　　敢へて太陽に近づきて飛ばんや
未足臨書卷　　未だ書卷に臨むに足らず
時能點客衣　　時に能く客衣に点ず
隨風隔幔小　　風に随ひて幔を隔てて小さく
帶雨傍林微　　雨を帶びて林に傍いて微なり
十月清霜重　　十月　清霜重し
飄零何處歸　　飄零　何れの処にか帰らん

「腐草」から生まれた螢は、日陰に生息するものであり、大胆にも太陽に近ずこうなどとはしない。一方、透谷の「ほたる」も、「身を恥づる」ことを知るだけでなく、杜甫の「太陽」に対照的な「月」を描き、加えて、その自ら輝く太陽に「近づ」くという主体的な行為とは逆の客体的な発想で「照らされ」る「ほたる」を描いている。

杜甫の「螢火」の第三、四句では、いまだ書を読むに十分な数ではないが、旅人の衣服にくっついて明るく照らすくらいの微小な能力を発揮している。一方、透谷の「ほたる」では「客衣」を「点」すどころか、「暮れかゝる草陰に」、「わづかに」、着物ではなく「影」だけを「点」している。透谷は、杜甫の「螢火」を意識しながらも、さらに憐れな存在として「ほたる」を描いている。

2 「ほたる」と「蛍」（草稿）の相違点

「ほたる」は明治二十六年六月三十日『三籟』第四号に掲載された。透谷没後、明治三十一年一月一日『文学界』終刊号（第五十八号）に自筆草稿の「蛍」が掲載された。「蛍」と「ほたる」の間に、漢字の使い方の相違を除いて殆んど大きな変化はない。それについてはすでに橋詰静子の精緻な考察がある。[16]「蛍」の最終連を挙げよう。

蛍（草稿）
腐草に生を享けし身の
　月の光に照されて
もとの草にもかへらずに
　たちまち空に歸りけり

橋詰静子は第一行に関して、草稿では「生を享けし身の」となっており、発表本文の「生をうくる身の」と大きな相違があると言う。前者は「文法上の受身形または過去形の印象が強く、更に「享」という漢字が与える〈享受〉に通ずる〈～させてください〉の印象を留めるのに対して」、後者は「やるせない悲劇の身上を繰返す被造物として、ひとりわが身を超えて、人間一般に普遍化する響きを含んでいる」と言う。また、最後の行の「帰る」「消える」の相違が重要で、「帰る」には「もとあった状態に戻るという意味が濃厚」であり、「消える」のほうは「いずこへともなく行くといった意味で、思想性が稀薄であり、それだけに抒情的な色合が濃い」という。橋詰論文では発表本文と草稿との相違が詳細に分析されているが、理由については触れていない。何故、草稿では「享」と「帰」なのか。藤村の指摘をたどると、草稿と発表本文の相違が明瞭になると思う。

草稿の「生を享けし身の」の「享」という字の使用は杜甫の「蛍火」の「幸に腐草に因りて出づ」の「幸」に由来すると考えられる。そもそも「享」という字はもてなしをうけるといったありがたみのある「享ける」である。つまり、腐草から生まれるのを厭う一般の理解とは異なり、逆にそれを喜んでうけいれる杜甫の「幸」と同様、幸

いなことである。それをうけて、透谷は「生を享けし身」としたのではないか。

また、草稿にある「空に帰りけり」は杜甫の「蛍火」の最終句「飄零　何れの処にか帰らん」と関っていると思われる。杜甫には「螢火」の以外に「見螢火」詩にも同じ字が使われている。その最終句には「來歳如今歸未歸（来歳如今帰るや未だ帰らざるや。）」とある。透谷の草稿における「帰」の字は杜甫の影響が大きいだろう。

結　び

本論文では、漢文学素養を持っていた透谷が陶淵明を知ることとなった可能性を追究し、また、明治二十五年十一月五日、『女学雑誌』に発表された「鬼心非鬼心（実聞）」に、陶淵明の「乞食」に感服した透谷の姿が見えた上で、その半月後に書かれた「ゆきだふれ」と陶淵明の「乞食」との類似点を検討した。さらに島崎藤村の「北村氏は杜子美を読」むという指摘に基づいて、透谷の「ほたる」と杜甫の「蛍火」の関連を分析し、今まで解決されていなかった透谷の「ほたる」と自筆草稿「蛍」との用字の違いを杜甫の「蛍火」と比較することにより、透谷論に新たな一視座を与えることを試みた。

注

（1）「石坂ミナ宛書簡」（一八八七年八月十八日）『透谷全集』第三巻、岩波書店、一九五五年九月、一六六頁。

（2）神辺靖光「明治初年の東京府の漢学塾――「明治五年・開業願書」を中心に――」『幕末維新期漢学塾の研究』溪水社、二〇〇三年二月、三〇八頁。

（3）勝本清一郎「透谷と蒙軒學社――透谷の綽名について――」『東北文学』第四巻三号、一九七九年三月、六十四頁。

（4）「其の頃（大矢さんと仲好しの頃―引用者注）は漢詩を作つた何んでも大矢さんの話に依ると一ヶ月に三千首も作る。而も奇妙な詩句を並べてあるので大矢さんには判らなかつた「おい北村之れは何だ、ちつとも判らないぢやない

かと云はれると「もう少し勉強するさ」と済したものです」とある。（北村透谷未亡人談「国府津時代と公園生活」、『新天地』明治四十一年十月号）

（5）『透谷全集』第一巻附録、岩波書店、一九五〇年七月、六頁。

（6）「石坂ミナ宛書簡」（一八八七年八月十八日）『透谷全集』第三巻、岩波書店、一九五五年九月、一六七頁。

（7）平田禿木「北村透谷――故北村透谷の事ども――」（『中央文学』大正八年七月号）には「問題の北村透谷君は、実に稀れに見る思索の士であつた。天地の精に喰い入らねば已まぬといつた慨のあつたのは、実に彼の人だ。明の高青邱の詩を愛読して、一方ならずこれに傾倒してゐたがその『青邱子歌』の一節の如きは確かに君の意気を語つてゐる、『向水際独坐、林中独行。斷元気、搜元精、造化萬物難隠情』。その起句の、『青邱子臞而清。本是五云閣下之仙卿。何年降謫在世間。』も明らかに君の風貌を語つてゐる。『臞而清』、ありくと君の姿が偲ばれる。」と「吉原、鈴川への『春』の旅で、沼津からがた馬車へ乗つて一同三島へ向つた時、透谷君が御者台へ腰を下して、自ら鞭を取つた時の、凄い風貌は、同人誰も忘れない。支那ならば、『少為闘鶏児……気服諸侠徒。不依父与兄……』」の二箇所で、高青邱の「青邱子歌」と「感舊酬宋軍咨見寄」を借り、透谷を偲んでいる。

（8）山田謙次「北村透谷における陽明学」（『近代文学試論』第十六号、一九七七年十一月）、槙林滉二「北村透谷と漢学――陸士衡、荘子を中心に――」（『国語学国文学論攷』溪水社、一九七八年十二月）、蘭明「「万物の声と詩人」における老荘思想――六朝文論との類似性からみる場合」（『透谷と現代』、一九九八年五月）等がある。

（9）「或邊に於ては、彼は淵明に似たりとも云ふべし、或邊に於ては彼は陽明に似たりともいふべし、或邊に於ては、彼は孟軻に似たりともいふべし」（『透谷全集』第三巻）。

（10）注釈は桶谷秀昭『北村透谷』（筑摩書房、一九八一年十一月）による。

（11）『北村透谷』「年譜」筑摩書房、一九七六年十月。

（12）第一の冒頭に「帰田園居」の中の三連、第二の冒頭に「帰去来辞」の中の四連、第三の冒頭に「帰田園居」の中の六連、第四の冒頭に「帰田園居」の中の四連、第五の冒頭に「雅詩」の中の四連、第六の冒頭に「雑詩」の中の二連、第七の冒頭に「桃花源詩」の中の十二連が置かれている。

（13）宮崎湖處子「透谷庵を懐ふ」『国民新聞』、明治二十七年六月八日。
（14）佐藤善也『北村透谷と徳富蘆花集』角川書店、一九七二年八月、六八頁と四二八頁。
（15）「透谷を嗣ぐ詩人たち――雑誌「詩精神」と梅川文男――」『国文学攷』第一七六、一七七号合併号、二〇〇三年三月。
（16）「空に帰するもの――「蛍」「ほたる」論――」『透谷詩考』国文社、一九八六年十月。